

2021 くずし字ワークショップ（翻字） 担当山本和明

ざっと作成したものですから誤りもあるかと思えます。くずし字学習の一助として
いただければ幸いです

session 1 くずし字初歩

53 枚目

四方赤良

ㄨかくばかりめでたくみゆる世中をうらやましくやのぞく月影

朱楽菅江

ㄨ立てみし柱曆もねころんでよめるばかりに年はくれにき

54 枚目

㊦ むかし男有けり。そのおとこ身をえうなき物に思ひな
して京にはあらじ。あづまのかたに。すむべきくにもとめに
とてゆきけり。もとより友とする人。ひとりふたりして
いきけり。みちのしれる人もなくてまどひいきけり。みかは
のくにやつはしといふ所にいたりぬ。そこを八はしといひける
は。水ゆく河のくもでなれば。はしをやつわたせるによりてなん。八
橋といひける。そのさはのほとりの。木のかげに。おりゐて。かれいひ
くひけり。其沢にかきつばたのいとおもしろく咲たり。それをみて
ある人のいはく。かきつばたと云五つもじをくのかみにすへて。旅
のこゝろをよめといひければ読る

（古今）

ㄨから衣きつゝなれにしつましあればはるぐきぬる旅をしぞ思ふ

session 2 絵本を読む

3 枚目

絵本小倉山序

小倉山荘の百首世に行るゝ事久し
く。しづ山かつの女わらべまで。朝によみ
暮に誦して玩艸とはなりぬ。しかはあれど
その歌の意はありそ海の底よりふかく
敷島の道に習へる人だにもたやすく

4枚目

弁ふるることかたし。いはんや賤屋まがつの
輩は徒に其言の葉を読のみにして止め
今年なん彼郷の五百年の遠忌にあたり
ぬれば西川氏が筆をやとひやごとなぎ
雲の上なることをばしづが手わざの絵に
うつし桜木にちりばめ侍る是や女童に
至るまでもおろく其意を暁し得ば
いと興あることに思ひ或は彼郷の古を
慕ふこゝろのよるべにもやと世に広むる
事にこそ

酔墨子

の枚目

山辺赤人

〱田子の浦にうち出て見れば白妙のふじの高根に雪はふりつゝ
此こゝろは田子のうらにふねさし出してかへり見るにこそふじのたかねの雪も見えおもし
ろかるべしと也

1枚目

喜撰法師

〱我が庵はみやこのたつみしかぞすむよをうち山と人はいふなり
此こゝろきせんほうしみやこのたつみうち山に庵をしめて住り
人はよをうち山といへともわれはたのしみてかくのごとくこゝろよくすむといへり

8枚目

小野小町

〱花の色はうつりにけりないたつらにわか身世にふるなかめせしまに
此こゝろわが身のよにふるおひをくはんじて花によそへて思ひをいひのべたるなり世の中
のありさまさかななるものはいつのまにかいたづらにおとろふる心也

6枚目

大江千里

〱月見ればちゝものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど
此こゝろ月を見れば色くゝの事どもおもはれてかぎりなきかなしさの身にまとひたるやう

に思はるゝちゝとは千の字なりわが身ひとつの秋にはなけれどもといへる心なるべし

10 枚目

小倉色紙の写 河内国山田村伊達弥十郎嘉方の家蔵

あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

11 枚目

紀友則

久かたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちるらん

此こゝろはあめ風に花のちり侍ることは申事なし風もふかでのとくとし侍るにはなのしづかにもなくちる事のうらめしきといふ事なり

12 枚目

平兼盛

忍ふれど色に出にけりわが恋はものや思ふと人のとふまで

此こゝろは人にしられじとおもへどもしのびあまりてはや物おもひをするやと人したふま
でいろに出けりとよめるなり

20 枚目

嚴冬素雪の晨には松君子の徳を顕とは。婦徳のたゞしくいみじきを貞木の比ふる成べし。されば世に女今川と云る書あり。誰人の作といふ事をしらず。幼女の身持鑑として実に類なき玉音たり。此に鈴木氏の善画を需二巻となして幾十回の春に。猶色かえぬ貞操草（みさほぐさ）と題して幼女の教となすのみ

安永かのえいぬの春めでたき日

22 枚目

今川になぞらへみづからをいましむ制詞の条々

23 枚目

一、常の心ざしかだましく女のみち明らかならざる事

一、若き女無益の宮寺へまいりたのむ事

一、少しき誤とてあらためず破にいたりて人をうらむる事

24 枚目

一、人の中云（なかこと）を企て人の愁をもつて身を樂む事

一、衣類道具己美麗をつくし召仕見くるしき事

- 一、貴きも賤きも法ある事をわきまへず氣隨を好事
- 一、人の非をあげ我に智ありとおもふ事

25 枚目

- 一、正直にしておとろへたる人をかるしむる事
- 一、遊びに長じ或は座頭をあつめあるひは見物をすきこのむ事
- 一、短慮にして嫉妬の心ふかく人の嘲を恥ざる事
- 一、女の猿利根に迷ひ万事に付人を譏る事

26 枚目

- 一、継子を疎にして他人の嘲りを恥ざる事
- 一、男たるにはたとひ間近き親類たりともしたしみをすごす事
- 一、道を守る人をきらひ我に諂らふ友を愛する事
- 一、人來るとき我不機嫌にまかせいかりをうつし無礼の事

27 枚目

陰は陽にしたがふこと天地自然の道理なるゆへ夫婦の道を天地にたとへたれば夫を天のごとくうやまひ尊ぶは是すなはち天地の道なりさればいとけなきより心ばへやさしくすななる友にまじわり(略)

28 枚目

かりそめにもみだりがはしく賤き友に近よるべからず水は方円の器(うつはもの)にしたがひ人は善悪の友によるといふこと実なるかな爰をもつて能家をおさむる女は正しき事を好むよし申伝るなり人の善悪を知り給ふべきは(略)

29 枚目

其人の親む輩をみて知るといふ事寔にはづかしき事也家を乱す女はかだましく氣隨なる事を好むといへば朝夕みづからこゝろをかへり見てあしきをさり善にうつりすゝむべし五常の理をうけて生れたりといへども(略)

30 枚目

かだましく邪になりゆく事誠に口惜き次第なり幾ほどなく他の家に行夫に随ひ舅姑に仕ふる身なれば父母の許に留るはしばらくの間なれば孝行を尽す事第一なり面に白粉をかざり髪貌を粧ふのみにて心のゆがみを(略)

session 3 幕末明治戯作を読む

46 枚目 適宜漢字をあてています

くにて婚姻の礼物の品々と田毎姫を人知らず我が術にて奪ひ取りしにさては田毎と思ひしは弓の介が娘でありしよなそれと入れ替え乗り物にて入りこませたる女こそ我が手下なる恵吉(ゑきち)といふ者例へ如何ほど人数を廻し我を捕らゆる手配りなすとも我いかで汝ら如きの似非者どもの手に乗らんや最前より捕らはれて奥にありつるこれなる恵吉は我が妖術にて宝蔵に忍び奪はせ置きつる月形の印尾形の系図これを見よと言ひつゝ恵吉の懐中より(略)

47 枚目以降

省略(ルビがありますので適宜読んでみてください)

session 4 浮世絵等を読む

4 枚目

狂歌歳旦〔春駒押絵図〕

皆友敦丸

〽手まりつくひまもおし絵の細工すぎ

続飯(そくい〓糊) ねる間も春駒の夢

逆鉾下足

〽押画にも気をはるこまの綾にしき大まき小まきの裁(たち)をあつめて

○山東京伝

〽御細工に念の入たるはる駒や左の袂に三日三夜

錢屋金埒

〽姫のりのやはらかな手につながれて心地よいとや申春駒

○狂歌堂(真顔)

〽小ぎれにてはるの初の春駒はのりかけんさへよいとや申

うのはつ春

6 枚目

〔金鳥〕 岳亭(春信)筆

心によるこぶことのありて

〽千金の春をしらす初こゑも棟のからすの数の羽かさね 倭和多守

〽よろこびのきの下なれやからす羽の黒(墨) 江にめだつ春のあけぼの

霞仙亭桃人

7枚目

〔朝三暮四〕 応需 岳亭描（二代目か）

麻生 国字垣歌志久

〽佐保姫も／猿も霞の／梶袖に／はつひ鹿の子の／べに染ぞよき

全 平原舎真郷

〽立かはる／はる名の幣は／さるにても／さるのわざにも／およばざらなん

真字垣万事馬

〽としもまたおなじなゝつこのみ鳥飛てよろこべみづのあしたを

∞枚目

〔楊貴妃〕 北溪（画）

秀陽亭百花

〽粥つゑや柳ごしをも春の風

〽八重ひとへ花もかた見か伊勢椿

9枚目

三鳥の内 狸々いんこ 北溪（画）

吾安亭楽住

〽から鳥の／翅（つばさ）もからで／けさははや／霞ぞわたる日の本の鳥

西来居

〽鶯（おしどり）の茶屋が素酒（すざけ）にもふり出すゆかりの色にそふる梅がか

10枚目

〔初音〕 其吉

千住 関屋里元

〽うめの花さけにうかべてこばさねどこほしきものは鶯の聲

11枚目

「霞連 草木合（窪）俊満製」 牡丹 燕子花

〽春夏の／あひのいろなる／杜若／水のあさきに／ふかき紫 愚連堂凹

〽花の色は／餅屋酒屋と／咲分て／どれも目につく／隣草哉 俳諧歌帰

12枚目

掛軸 千蔭書画

〽屋根舟もやかたも今は御用船ちつゝんはなくつつちつんで行

13 枚目

短冊

新樹 木の下のやみはあやなし梅さくら

しげりて松もかやも隠るゝ (暁) 鐘成

禅林寺の萩をみて

山深み露にうもれて秋はぎの

はなのさかりもみる人ぞなき (小澤) 蘆庵

14 枚目

錦絵「恋合 端唄づくし (組物) あさがほ・阿曾次郎」

万延元年 (1860) 豊国 (国貞) 画 若与板 (若狭屋与市)

ㄨ宇治は茶所さまざまの中に噂の

大吉山と人の気にあふ水にあふ

いろも香もあるすいたどし (同志) すい (粹) な

うきよ (浮世) にやぼらしい

こちやこちやこいちや (濃茶) の

なか (仲) じやいな

ㄨあさがほ (人名と慣用句を掛ける) につるべとられて

ものおもひ人の心と淀のみづ

はやあけちかき 鳥羽の船もやひ

はなれじ ったかつら

こゑもやさしき

田うゑうた

15 枚目

縞揃女弁慶 (しまそろひをんなべんけい)

落款：一勇斎国芳画

時代：天保 15 年 (1844) 8 月

版元：江戸・伊場屋久兵衛

梅屋

ㄨをさな子もねだる安宅の松が鮎あふぎづけなる袖にすがりて

17 枚目

今世斗計十二時 巳ノ刻

落款：五渡亭国貞画

時代…天保年間(極印)

版元…浜松屋幸助

六蔵亭宝馬

「身じまひの巳の時ごろは紅頬をだにさゝぬ芸者に口のかゝれる

18枚目

百人一首絵抄 卅一

絵札・字札

「春道列樹 山河にかぜのかけたるしがらみは」「ながれもあへぬもみぢ成りけり」

此心はしがの山ごえにてよめるなり 山川の木のはをひまなくふきかけたるが 水のしがらみとなりながれおふせぬてい也 かぜのかけたるしがらみは何ものぞと見れば ながれもおふせぬもみぢにてありけり 我ととひわれとこたへたる歌のさま也 しがらみいふものは人をして川にかくるものなり しかるを風のかけたるといふことばめづらしくとの事なり

19枚目

東京料理十八肴 今戸 有明楼

落款…一恵斎芳幾筆

時代…明治4年3月(極印)

版元…木屋宗次郎(「馬喰四ノ木屋板」)、彫師「彫工栄」

填詞

横文字の手ぬぐひに調理の文明なるをあらはし 西洋風の座敷には交際の広きをぞ思はるされば太神楽の鞠にはづみ 平坊の手振に渴歩なる客此楼に絶ずして 左右に眺むる不二筑波 向ふに見なす堤の花 娯楽延齡おのづから菊といふ名も空しかるまじ 山々亭有人記

session 5 様々な書物に触れる

3 枚目

煮方

四季寒暖にしたがひ、夫々のかげんは煮方の巧拙にあり。いか程山海の珍味を尽すとも、かげんあしきはふちそう(不馳走)といふべし。

4枚目

料理方

家々の流儀ありて等しくはいふべからず。されどあまり巧(たくみ)なればしぜんの美味を

うしなふ事あり。心すべし。

5 枚目

献方

献方は饗応の惣奉行にして、しばらくも其席を退く事なく、居ながら座敷のもやうをかんがへ、料理・煮方の怠りを正し、給仕、配膳に卒忽なからしむ。其事に馴ざる人の勤め得べきにあらずかし。

の枚目

魚類精進／早見献立帳

凡例

一 夫貴人高位の御館には包丁料理の家元ありて御慶賀の軽重により五々三三五三或は高盛平盛等夫々古例法式皆家元の秘伝にして素人の做得る事にあらず此早見献立帳は畢竟民間の遊宴または仏事などに素人の手料理集めたる所なれば識者その式法なきを咎むる事なかれ

8 枚目

二月 魚類 二汁七菜／一汁五菜／一汁三菜

生盛 生す さより糸づくり しらがうど 岩たけ くりせうが

汁 ふくさ(袱紗 合わせるの意) いせゑび小口きり 青のり わりざんせう

坪 こくしやう(濃漿 魚や野菜などを煮込んだ濃い味噌汁) たいらぎ(貝) きくらげ

ざんなん 干ざんせう

飯 香物

二(の膳)

差味 霜ふり鯛 みる貝 わさびのくきわりて

汁 すまし しほ雁 ゑのきだけ すひ口ゆ

小ちよく いりざけ

引て

猪口 二はいず 鯉 よめな

平皿 せんば しほ引鮭 葉つきかぶら 大やきぐり

焼物 かけじる 大石がれい

台引 焼鯛きりみ とうがらし醬ゆ色付

吸物 うすすまし むきはまぐり つくつくし こせう

くわし 已上

○霜ふりだいはたいをいかやうにもつくり、べつにたまごをにぬきしろみばかりをよくすりて、かなすいのにのせ、ゆびにてすれば、こまかくおつるを、つくりたるたいにつくる

なり

○わさびのじくを一寸ばかりにきりたつにふたつにわりてすにしばらく付おけばうすあかくなる

○ちよくのこいは平づくりよし

6 枚目

料理の心得

一、料理は塩梅はもちろん取合盛方心得第一也 先取合は青黄赤白黒を専とす 又盛方は円方長短を考へ山水をかたどる心得あるべし 何程厚味佳品なりとも取合盛方のあしきは不馳走のうちと心得べし

一、加減第一也尤辛口ありあま口ありて数人の一々口に合やうにとては出来ざるものなり しかれどもその鯉出し昆布出しにかぎらず第一に出しのかげんを至極叮嚀になし置ばたとへ客の口によりてかげんは少しかなはずとも塩梅によりてうまく覚へ数人の口になふものなり たとへ加減はよくともうまからぬは塩梅のたらざる也 されば塩梅は原にして加減は後と心得べし 大方の人塩梅も加減もひとつ〔事とおもふは大なる誤なり〕

10 枚目

※掃寄草紙は読みやすいと思しますので省略

12 枚目

文字べにかのこ菊の花に所ぐあさぎかのこ入花葉に所ぐ無地あさぎ入て白淺ぎの上をうはゑにて書べし

地うこん菊の露の模様

二条の後の模様

二条の後

しらたまかなにぞと
露にぬれかくるあくた
かはらのあかぬ中おに一口の
わかれの袖なみだの雨に
神なりさはぐもこひのぬす人の
たゝりにや月やあらぬ
はるやむかしの
むかし男色のもやうは今やうの
恋のひながたともなりぬべし
〽白たまかなにぞと人の
とゐしとき露とこたへて
きへなましものを

13 枚目

ころはやよひの花ざかり
さかりのむすめ打むれて
さくらのかげにまくを打
花よりだんごとさゝへを
ひらきまづお一つと
さしつおさへつ
其こゑぎけば
何かおかしく
思はるゝ
なり
あのぬし様にみせたい
あれみへます

17 枚目

かけまくも忝く天満天神のいにしへ菅原の
大臣と申せし比讒言によつて心づくしに
さすらへ給ひし時廢所の御つれぐゝ常に御
寵愛ありし梅桜松の三本の木をゆかし

18 枚目

く思召出されて春のはじめによませ給ひけ
る御歌

〱東風ふかば匂ひをこせよ梅のはな
あるじなしとて春なわすれそ

とよませ給ふ所に梅の香かうばしく匂ひ
ければ誰が袖ふれしとあやしみ思召けるに
都の御ていにうつし植られし紅梅根より
ぬけてこくうをかけりて飛来り御まへのしら
すにはへつきてけり菅相丞きどくの思ひを
なし給ひて御感のあまりに則是を飛梅と
名付いにしへよりもまさりてあひせさせ給ふ
或時此梅に向はせ給ひて

〱ふるさとの花のものいふ世なりせば
いかにむかしのことをとはまし
とながめさせ給ひたりければかの木にこゑ
ありて

先久於故宅 廢籬於久年

靡鹿於住所 無主又有花

かく聞へたりければいとゝあはれに思召けり
扱しも春も半に成ぬ都に植しさくらも

19 枚目

やうくほころびやすらんとゆかしく思召ければ
京より御見舞に参たる人にたづねさせ給へば
御別をかなしひ奉りてや此春にはかに枯候
なと申ければいと惜く思しめしてさては松ば
かりぞぬしなき宿に一本たつらんとおぼし
めしやりて御歌

〱梅はとび桜はかるゝ世の中に

松ばかりこそつれなかりけれ

とつゞけさせ給ふ折ふし空の気色常なら
ずこちふく風もはげしかりければいかなるさと
しやらんと人く空をみれば大きな松の
木ねよりほれてこくうを来り御庭前にゆる
ぎ立たり是はいかにと立よりみるにかの御てう
あひの松也けりあまりの御事に御なみださ
へおちざりけり一夜に白髪とならせ給ひけ
るは此時なりと老松とはこれなるべし

20枚目

踊形容花競

一陽斎豊国画／柳水亭種清作

初編より十偏迄当年出板

乍憚口上

四方(よも)の御見物様方(ごけんぶつさまかた)芳晴(おんめ)の属(ふる)ることにつ
け好美(かうび)の品(しな)にあらざれば求(もとめ)て／称誉(しようよ)したまはず
錦場(きんじやう)玉地(ぎよくち)に看(み)る花(はな)も言(ものい)はざれば詠(な
がむ)るにこゝろなく彼(か)の／豊国大人(とよくにうし)が画(ゑが)ける似顔(にが
ほ)も得(え)てねがはくは一言(ひとこと)いへなど好事(かうず)にかうずを欲(のた
ま)ふ／世(よ)とわれ知顔(しるがほ)に思着(おもひつき)たる此(この)さうしは合
卷(かうくわん)にしき絵(ゑ)見る随(ま)に動(うご)き出せるさまをなせど／誉(ほ
め)る君(きみ)あり誹(そし)る貴官(おかた)あり宛(さながら)活(いけ)る人物(じ
んぶつ)が踊(おど)りつ舞(まひ)つするが如(ごと)くその形容(けいよう)の色香(い
ろか)／を競(くら)ぶる高評(かうひやう)を搔(かき)あつめ錦袖(にしきそで)ふる
その場(ば)の交代毎(かはりめぐと)出板なせば幾久(いくひさ)しく売出(うりだし)
を／続(つゞ)いてお求め被下置御覧の程伏而奉希上候以上

板元 甘泉堂敬白